
C.Gの人類愛

はまな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C・Gの人類愛

【Nコード】

N5825L

【作者名】

はまな

【あらすじ】

人形は禁止されてしまった。フィギュアもドールも呪い人形も案山子もマネキンもアンドロイドもことごとく。それによって世界は幾分柔らくなったけど、僕のような不道德者は同じ外れ者の愛好者や販売組織と製造組織を結びつける人形専門の仲買人として日々を暮らしている。アメリカからも中国からも中東諸国からも、どこからだって手に入れて、送り届ける。

ある時、僕はある精巧な等身大ドールを輸入する。それは僕の過去や未来に絡みついて、やがて多くの人間をある島へと誘う。

01

01

死体を見たことは、一度や二度のことじゃない。

確かにそれは日本にいる限り日常からは隔離されたものだけけど、人は致死率十割の生き物だ。銃と人間が揃えば、必然そこには死体が転がる。僕は職業柄（と言っていいのかどうか曖昧なところだけど）死体は見慣れていた。ついでに銃も。

噓せ返る血臭や細切れになった腹の中身から漂う悪臭が大抵セツトになっていて、だからこそ死体は死体だと理解して、処理するこ
とが出来たのだ。

死体に嫌悪感が無いわけではない。最初に見たとき、それはみつともなく驚いたものだ。その辺は本当に、慣れだと思う。医者はいちいち開腹するたびに嘔吐したりしない。

勿論直接殺戮に関わらずとも、凄惨な死体ができる現場に居合わせることもあるということだから、悪夢に苛まれることも多い。

僕は困惑していた。いや、生易しい言い方だ。率直に言えば、発狂寸前なのだ。

僕は清潔な病室に立っている。清潔な壁、清潔なカーテン、清潔なベッドにシート。

そのベッドに横たわるのは、僕と同年の女性だった。少女と言ってもいい。

「昨日都内にて起こった暴動は今朝にはほぼ鎮圧が終わり、昼ごろには交通規制も解除される見込みとなっています。政府は今回鎮圧したのが最後の『愛好家』グループであり今後は円滑に……」

隣の病室の物だろうか、テレビか何かの音が聞こえた。連日放送され続けたそのニュースは、すっかり耳に馴染んでしまった感がある。

少女は——彼女は、ほとんど死んでいるかのように、静かに白い布に埋まっている。ふつくらしたその布団は恐らく特殊な病院用のもので、使用者の様々な身体的状態を読み取り日常的検査から寝返り、体温調節などを同じく特殊なベッドと一体になって行う。未曾有の少子高齢社会の中で介護・看護関連のこうした器具は目覚しい発展を遂げている。

販売会社・機能は様々で、温度調節のみの家庭向けの物から、排泄まで管理する全看護用まで一通り揃っているという話だ。いま彼女が身を預けている物は、どの程度のモデルなのだろうか。少なくともちよつとしたお金持ち程度が気軽に購入できるほどにライトなバージョンではないだろう。

彼女がいわゆる『活動家』であつたのではないかという根も葉もない噂が病院内には漂っていた。昨日の暴動の最中、彼女は頭を思い切り路面に叩きつけてしまったらしい。それがどういう経緯でそうなつたのか、救急隊員も含めて誰も知らなかった。暴動は突然起こり、瞬く間に町の一部をもみくちやにしたから、関係ない人も大勢怪我をした。彼女が当事者であるか善良な一般市民から出た被害者の一員なのかは僕も知らないし他の誰が知っているわけでもない。彼女に直接聞くことも出来ない。脳挫傷の意識不明患者は語らない。

僕が困惑する理由はいくつもあつた。その中で一位が彼女ののこした手紙で、二位が彼女の姿自体だった。

僕は死体を見慣れている。死体を見て無様に腹を押さえてうずくまることも、悲鳴を洩らすこともない。

僕が困惑しているのは、彼女が死体ではないからだ。死体でないのに動かず、反応せず、生きている気配が希薄であり、つまりそれは、現代の先進諸国世界に生きるほとんどの人間が感じたことのないものを思わせる——つまり、人形を。

彼女は人形に見えた。人形。フィギュアやドールや案山子やマネキン……僕らの知らない世界。この社会を支える安定策。愛ある世

界を作るために規制された嗜好品。

そしてその人形めいた彼女が僕宛に残したものは、僕を今発狂に
追い込んでいる。

02

02

輸送トラックが横転した。

つまらないスリップ事故だったらいい。自動運転装置や危機回避装置が十分に詰め込まれた現代車ならまず避けられたであろう事故。実際、福井から名古屋へと向かう高速道路上でいきなり倒れたその大型トラックに巻き込まれた車両はたった一台だったらいい。

問題は、そのトラックが法律で禁止された積荷を満載していたことと、それが濡れた路面にばら撒かれてしまったこと。更に、その違法物品を目にした一般人達が、原因不明の狂気に襲われてしまったことだ。

通行をせき止めるように横倒しになったトラックの存在に、多くの乗用車が事故現場の手前で足止めをくらうこととなった。勿論その中には暇に耐え切れず野次馬根性丸出しで事故現場を覗いたやつも大勢いてそいつらの内三割ほどは、散らばった積荷を見てから数分、ほぼ例外なく殺し合いを始めた。

手と足が力いっぱい振り回され、ぶつかり合った。手加減も何もあったものではなく、自らの拳がひしゃげることも全く気にしない強烈な一撃があちこちで首や肘や腹を潰した。

あるいは、もぎ取った車のドアを投げる奴もいた。誰もが凄まじい勢いで争いを始め、死ぬまで元気一杯暴れまわる。

そんなことがあって、地面にばら撒かれた大事な積荷は靴底で踏み荒らされた上に千切れた筋肉や脂肪、脳漿なんかで汚れてとても品質が保たれているとはいいがたい——まあ、端的に言ってゴミになっってしまった。

その積荷は大事な商品で、納入されることなく失われてしまったのだ。当然、代わりのものを用意しなくてはならない。

僕は、食品会社のくたびれたトラックを偽装する計画を後から猛烈に悔やんだ。台無しも台無し、積荷はともかく、死者が二十名以上出たのだ。はっきり言ってわけの分からない事件だったが、とにかく次からはあんな古臭い十年以上前のモデルのトラックなんか使わない。

「これで全部だ」

携帯電話でリストを受け取って確認する。事前の予定通りの商品がずらりと並ぶ中に、一つ知らない商品を見つけて僕は目の前の中国人へと視線を戻した。

日本人とは微妙に印象の異なるその顔は、しかし愛嬌が合った。寂れた港（それは当然で、この島は中国の地図には載っていない非公式な土地だ）の錆び付いた風によく似合っているとも思える。

僕は一つ疑問を口にした。

「この クリスティーヌ Christine ゴリッサ Gorissa っていうのは」

男は微かに笑ったようだった。苦笑したのだろうか、掠れた声で流暢な日本語を話すそいつは、静かに言った。

「おまけだよ。等身大の、次世代ラブドールって話だ」

「ラブドール……」

驚いて、リストを再チェックする。今回の入荷は、カプセルトイ系を中心とした小物ばかりだ。その中であって、C・Gorissa は身長150センチ、重量三十キロとなっている。

「こんなもの、一体何処から」

「俺たちの工場で作ったって言ったら信じるかい」

皮肉気に男は唇を吊り上げた。無論、彼の工場にそんな設備や技術者が揃っているはずもない———というか、こんな違法行為で糊口をしのぐ者たちの中で、そんなことが出来るほうが異端だともいえる。

無言で男を見返す僕に、溜息と共に説明が送られる。

「回しもんだよ。何処で作られたかわからないんだが、やたら精巧な作りの等身大ドール。何十体か作られたらしいんだが、ほとんど

は政府に没収されたいらしい」

「政府……どこの」

「だから知らないんだよ。作られた場所も、取り上げられた場所も、こつちでは有名な話だよ。日本じゃ聞かないのか」

「聞かないな」

「あんまり出来がいいってことで、色んな奴が欲しがってるんだが……いかんせん俺たちが相手じゃ足元見られてまともな値がつかない」

「なるほど」

だから、僕の元へ持ってきたわけだ。日本有数の人形仲買人の僕の元へ。
ブローカー

確かに、僕はまともな値を彼らの作る商品につけることの出来る数少ない存在だ。流通ルートには信頼が存在し、それは容易には裏切れないからだ。こと、そのルート自体が貴重な市場では。

「どうかな。値はデータにつけてあるけど」

確認する。安いものではない。通常のラブドールと比べても五割り増しだ。

「実物を」

言って、僕と仲間たちは港の倉庫へと入っていった。

二十一世紀になっても洗濯機から服を取り出してベランダに吊り下げる光景は変わっていないし、無くなってもいない。二十世紀に子供達が夢見た空飛ぶ車もチューブ状の空中道路も存在しない。勿論各分野で目覚ましい発展は遂げているけど、それは日常というには少し特殊な部分でのことが多い。機械神経とか、全自動介護施設だとかは、あくまで日常からは距離が離れたままだ。

そうしてだらだと二十世紀末を引きずったような、変化に乏しいはずの日常広がる二十一世紀初頭なのだが、二十世紀に人類が所有していたのはつまらないテレビ番組や革新と呼べるほどの変化を全く見せない炊飯器や掃除機などだけではない。数々の近代兵器が

生まれたのも、それによる世界大戦や民族紛争や大量虐殺、世界中のジェノサイド——前世紀はパンチの効きすぎた時代でもあったのだ。

それが余すことなく受け継がれ、テロリズムとその反動は輝かしい新世紀においてその実力を発揮し始めた。飛行機はビルに突き刺さり、鉄道は爆破され、半島からはミサイルが発射された。復路を持たない、目的意識の元にその後のことを予測した作戦なんて物を嘲笑うかのような、一種絶望的行為による殺戮が数多く立て続けに行われた。それこそ、最盛期だった二十年前は交通事故のニュースが全てテロに取って代わられたかのようにだった——らしい。

当然、それに比例して国家政府が行わなければならない労働も激増した。人道支援、平和維持、安全保障……結構なお題目で自国の利益を守るという前世紀的な活動というよりは、自身の滅亡を省みない攻撃行為が世界の、とりわけ貧しく、排他的で、故に被排他的な国や地域から迫ってくることに怯えたかのように先進諸国は暗殺し爆撃し新しい政府を建てた。

が、虐殺やテロを統治する頭を挿げ替えたところで、混乱は収まらないのだ。

絶望的なのは彼らテロリストだけではなくた。常に絶望的な人間の攻撃を予想できる状況にある我々もまた、常に絶望的だったのだ。

世界の富は、資源は、二千十四年の時点で七十億ほどいた地球人口すべてに冷暖房のついた部屋でパソコンと睨めっこし、一時間かけて化粧しショッピングモールにデートに出かける生活を与えるには少なすぎる。どこかで先進国の一人のために、例えば年収たった数万円で採掘し続ける少年少女が何人か何十人かいなきゃならない武器といえばコピー品のAKがせいぜいの彼らは、常にコントロールされる不満をぶつけようにも、国すら満足に保てない、そう、数万円の年収が無ければ。そこで、鉄道を、ビルを、腹に抱え込んだ爆弾でぶっ壊すのだ。泥沼の状態でも、変化が起これば少しはマ

シな状態が維持できる。

だからと言って、そんな酷い状態の世界をどうにかする方法だつて限られている。普遍的な人類愛の元で、アメリカも中国も日本もロシアもヨーロッパも、またカンボジアもラオスもバングラデシュも名も無い小さな部族も皆で分け合い、賢い者を尊重し助け合い等しく犠牲を払えば、平均寿命は下がるしパソコンだって化粧品だつてなかなか使えなくなるかもしれないが平和は得られる。でも当然、そんなことをするためには僕達は自分の周りを愛しすぎていた。家族がガンの治療を受けられなくなる代わりに何処そこの国で単なる風邪や食糧不足で死ぬ子供が十人くらい助かるのです、といわれても、動く人間は少なかったのだ。

何が悪いのか。どうしてこんなことになってしまったのか。

色んな人々が考えたし、苦し紛れの論文も多く提出された。どれもが不十分な説明で終った。

が——ある研究者が、一つとんでもない論理を展開した。アメリカに居住するイザキという日本人で、心理学、大脳生理学、歴史、哲学、様々な分野に手を伸ばしその全てで独自の論理を展開する、ある意味典型的な外れ者だったらしい彼は、人の不均衡さの原因が、愛情の不均衡によるものだとする文書を発表した。

曰く、自己の周囲にだけ極端に重きが置かれ、知らない人間を単にゼロとして扱うのではなく、近親者のための犠牲とすることを厭わないばかりか当然とする……人間の愛情は基本的にその機能が自己愛に傾き、人類愛を遠ざけている——。我々は言葉によって自己を持つことで愛情を獲得したが、同時に全体性と言う自然を欠けさせた。

馬鹿な話と、一蹴されるところか当初は「読まずに棄てられる」類のタブロイド紙と同等に扱われたこの話だが、イザキ本人がある実験を行ったことで一躍脚光を浴びた。

彼は、極端な自己愛をもつ人間や、ある特定の団体、宗教、人種、遺伝的特徴を溺愛しそれ以外を排斥する性質の人間を集め、彼らを

矯正したのだ。

愛の矯正。口にすると鳥肌が立ちそうな寒い舌触りだが、なんにせよ効果は劇的といえるほどで、自爆した過去のあるイスラム教徒はクリスチャンと同棲するに到ったし、黒人が笑うだけで激昂していた女は顔を手で覆いながら何故そんな自分だったのか全く分からないと実験中何度も嘆いた。

ある学校では身体的特徴を理由にした虐めがパタリと止み、どこかきこえないものの平穏が訪れた。

二千年にはその実験を始めとしたこの「愛の理論」は世界中で真剣に議論され、ブラッシュアップされていた。何に向けてか——当然、世界規模で愛を拡散させるためである。

何故先進国に生きる自分達は貧しいテロリスト達を、餓死する子供を救おうと思わないか。悲惨な事件が頻発する社会情勢の中で多くの人が抱えていた問題、どうして自分の愛は人類愛に向かないかという問いを、イザキの研究は救い得るとされた。

二千十五年、ついに、多くの先進諸国の間でそれは決定された。イザキの理論の元に膨大な数の研究者が集まり作り上げたモデル。それを下敷きに、人々を柔らかく平和な、全体愛の世界へ誘うと期待された決まりごと。

日本では「人形禁止法」と俗に呼ばれる規制の始まりだった。

「これだよ」

倉庫の暗がりを安っぽい白い光がしらけたように照らし出す。男が指したのは、倉庫の中に散らばる荷物の中でも一際大きいものだった。

ちょうど、棺桶くらいの大きさだった。中身が等身大ドールであることを考えれば、それは当然過ぎることかもしれない。箱はダンボールなんかではなく、機械的な、高価そうなものだった。箱の顔の辺りが透明な素材になっており、中の人形を覗くことができる。

僕は息を呑んだ。それは、とんでもないものだったからだ。

「驚いたかい？」

そういわれて、頷くことしかできない。僕は様々な人形を取り扱ってきたし、その中には精巧なマネキンやぞっとするほど気配の濃い球体関節の等身大ドールも存在した。それらのことを思えば、ラブドールなんてのは、何をいまさらという感じだ。

そのはずが、そいつはただのラブドールなんかじゃなかった。むしろ、こいつを性のはけ口に出来る人間はそうそういないだろう。閉じられた瞼も、皮膚の質感も、髪の色も、全てがリアルすぎた。魂の無い生身だといわれれば信じてしまうほどに。

そして、気がつく。物々しい豪華な作りの箱が、単なる入れ物ではなく、温度管理や空気の循環などを行っていることに。

「これは凄いな」

「そうだろう。どうだ、買うかい」

正直、少し迷った。

その人形の生々しく綺麗な顔は、僕にとって懐かしい顔でもあったのだ……。

03

そういうわけで、僕は船にC・Gを詰め込んで海上を移動し、緊張の只中にいる。僕は得意でも不得意でもない射撃を行うために船の左右両側に付けられた銃座のうち左側に取り付いて、並走する船を木っ端微塵にしてやろうとトリガーに指をかける。

僕達の高速輸送艇は、小型ですばしっこく、それなりの積載量を誇る。船自体が公園に置かれた前衛的なオブジェのような奇妙な形状をしているのは、電波的な存在の探知を避けるために形状制御技術と電波制御体技術を組み合わせた結果であり、つまりはステルス船だからだ。通常の軍用船舶と比べても飛びぬけてかくれんぼの上手いこの船は、しかしそのみょうちきりんな形ゆえに安定性においても一步以上一般の船という奴に劣る。そう海面が荒れているわけでもないのだが、速度を出して進むだけで何か過酷な修行のようであり精神修養にでもなりそうな船酔いに襲われることにもなったりするのだ。

機銃はビギナーにも扱い易いように作られたもので、元々民兵の多い紛争地帯用に先進国で研究されて作られたものだ。世界が人形を廃し徐々に、ほんの少しずつ人類愛に進み始めた中で、悲惨な民族紛争を限られた数各国ではなく途上国までも含めた多くの国で支援し収束させる動きがここ二十年で加速している。以前までの、大国主導の「介入」的手法と何処まで異なる物であるのか、疑問も多く上がってはいるが、まあともかく、そんな中で素人用の兵器はいくつも開発されたのだ。

船首に鎮座する、機械制御の砲と連携して、相手を追い詰める。相手の船。

僕達と同じ、小型の船舶ではある。しかし奇妙だ。

その船は、こちらに向かって停止するように求めているのだ。まだ互いにはつきりと姿が見えるような近距離ではないものの、船のシルエットくらいはスコープ越しに見える。

相手は左側を並走している。しながら、徐々に距離をつめてきている。

「おかしくないですか」

機銃の前に立つ僕に、横から声をかけてきたのは今回の仕入れに随伴してくれた仲間だ。僕の所属する業者——仲買組織は、実は僕の父が起こしたものだ。その中で僕は主に実績によって臨時の代表を任せられそうにまでなったんだけど、ちょっとした理由があつてまだこうして実働部隊にいる。人形の取り扱いには医療軍事その他特殊な理由がある特殊な資格者のみに許されるものであつて、先進諸国における人形愛好家も、それを顧客とする業者も犯罪者ではない。麻薬密売みたいなものだ。

そして業者同士の対立があることもまた、麻薬取り扱い人と似ているところかもしれない。と言っても麻薬自体とうに廃れてしまった物だから、高校のときの社会科で少し習った程度しか知らないんだけど。

確かな収入を約束する裕福な人形愛好家は、その裕福さに比例して安全をも求める傾向にある。彼らは自分が一度信頼した仲買業者を長期に渡って利用する。

結果として、顧客獲得のための争いは激化するわけだ。元々犯罪組織同士だから、その喧嘩の仕方多少荒っぽい。海上で襲われる事だってないわけじゃない。僕も二度ほど経験がある。

が、そうだ、今回の相手はどうもおかしい。

「あの船、停止を要求してます。それに、どうも船自体の形といい取り付けられた武器といい、ライバルには見えない」

喧嘩は、突然始まって突然終るものだ。停止要求は受けたことが無い。そういったことをしてくるのは、海保とか海上自衛隊とかだろうか。しかし——

「日本らしくない……」

僕は呟いて、隣を見た。今この船に乗り込んでいるのは僕と、隣で不安げな顔をしている新人の佐田と、操舵しながら射撃ソフトを調整しているいかつい男（ここからでもその大柄な背中が操舵室の中で動いているのが見える）鶴賀である。

三名の乗員。危機的状況に対処するに、これは充分とはいえないだろう。佐田はまだこれが二度目の取引だし、荒事には慣れが無い男だ。

相手の船は、グローバル化の著しい時代にはナンセンスな物言いかもしれないが、やはり日本らしくない。日本における治安組織も、僕の同業者も恐らく所持していないであろう形状の船であることが遠目にも分かる。通信で停船だけを求めて、後はひたすら無言で近づいてくる様は不気味だった。

貧弱な武装しかないこの船は、当たり前だが戦闘目的の船ではないし、もっと言えば戦争目的でもない。

「ぎゃ」

佐田が悲鳴を上げた。僕も上げそうになった。船が揺れて、視界がシェイクされる。

「くそっ」

鶴賀が呻く声が耳に入った。船のスピードが格段に落ちている。

「撃たれた、船体後部に被弾した」

鶴賀は元来落ち着きのある男だ。元軍人と言っても通用しそうなパーソナリティの持ち主で、咄嗟の事態にも強い。昔からの仲間でよく知っている。その鶴賀が慌てていることを読み取って、僕は焦燥感に駆られた。

「優一、撃て、逃げられんぞ」

僕を含めてこの場で一番頼りになるのは鶴賀だ。僕はちらりと隣を見やって、だめ元で訊いてみた。

「佐田、これ、撃てる？」

機銃のグリップを視線で示す。

今にも棄てられそうな子犬みたいな目で、僕と機銃を交互に見る佐田の様子は、何だか可哀相なものだった。諦めて、僕は自分で敵に狙いをつけることにした。

僕は死体を見慣れてる。取引は時に失敗するし、変な横槍が入ることも多い。そんな中で死人は珍しい存在ではない。

問題は、僕は一度も撃ち殺した経験が無いということだ。

トラブル自体それほどの回数をこなしたわけではないが、大体いつも鶴賀か、佐田の代わりに連れている別の仲間がやってくれる。僕の仕事はあくまで製造業者や顧客との連絡、ルート確保、商品の確認と保証だ。取引について行っているのは、商品自体を見極めるという目的が主なところだ。高速で航行する船同士での撃ち合いなんて上手くやれそうに無い。

それに。例えば容易に相手が撃てる状況であつたとしても、僕は撃てない気がする。

人殺しが存在する場所に身を置きながら、殺しの行為自体はしたことが無く、出来る気もしない。

が、そんな事情はお構い無しに相手は攻撃を加えてくる。射撃制御システムによって動く船首の機銃が火を吹き相手を撃つが、大してダメージを与えられないままに逆にずたばろに撃たれて分解してしまう。

異常だった。相手の船は、明らかに高い戦闘能力を保有している。たった数十秒の間に僕の船は推進部を故障させられ、無人機銃を破壊されてしまった。圧倒的なその火力で押し切れれば多分後一分もかからずこの船は沈むだろう。だがそんな気配は無い。

どうやら相手は本気で殺しにかかってきているわけでもないようだ。

僕は一気に引き金を引いて撃った。予想通り当たらない。嫌な予感がしてその場に伏せると、僕の使っていた機銃が破裂した。何か当てられたらしい。

「ひiiiiiiiiii」

佐田がべったり床にくつついて、恐怖で顔を引き攣らせていた。運のない奴だな、と思ったが、今は慰めてやれる暇も無い。

「鶴賀」

寝転びながら呼ぶと、鶴賀は必死で船を操りながら一瞬僕のほうを向いて唇だけを動かした。

『無理かも』

逃げられないかと訊こうとした事が読まれていたのだろう。僕はそれを見て片手で顔を覆った。どうしよう。

景気良く撃たれた弾が船体の一部をこそぎ取るように破壊し暗い海に消える。荷物を載せてある格納庫は無事だが、そこだって別に防弾使用とかではない。

「くそ」

毒づく。このまま商品の運搬に失敗すれば二度目の販売延期に客の信用は失うだろうし、折角手に入れたC・Gも海中に消える。それ以前に僕達三人が船と一緒にばらばらかもしれない。

自分が死んでしまうことと、周りの人が死んでしまうことと、全員まとめて死んでしまうのと誰一人死なないのと。どれが一番いいだろうか。善に適い誠実な選択がどこにあるだろうか。馬鹿なこともかもしれないけど、僕はずっと考えてきた。

とりあえず、何とかしたい。わめき散らすことで攻撃が止んでくれるなら、一昼夜泣き叫び続けたっていい。

思いが通じたのか——何に？——と思わせるほどにちようどのタイミングで、格納庫の扉が開いた。スライドしたドアから出てきたのは、人型戦闘口ロボットでも戦神でもない。

呆気にとられた。そいつは日本のマンションにおいてきたはずの同棲相手だったのだ。無論僕は男だから、相手は女性だ。

僕より四つほど年下のその女は、未だ学生の匂いが抜け切らない若い顔立ちの——ともすれば高校生で通りかねない容姿で、やや小柄だ。その体を寝起きのように伸びをしてほぐしながら出てきて、すぐこちらと目が合う。

何か言う前にそいつは転がり込むように身を低くして近寄ってきた。左手に何か抱えている。

「助けに来たよ」

ジャムが切れたの、と食パンを切り分けながら離すときと同じような声音で言われて、僕は自分の顔がなんとも表現しがたい表情を形作ることを感じてしまった。

「カナコ……」

絶妙に微妙、そんな声があったらびったりのかすれた呼び声になっってしまった。混乱はしているのだが、それ以上に彼女の突飛な行動は日常でも多く見られるものであって、それがとうとうこんなところまで伸びてきてしまったという諦めに近い実感があった。

「私もついていくって言ったのに、置いていくからだよ」

「ずっと隠れてたのか」

「倉庫は広かったし、皆が島に出ている間は自由だったから、そんなに窮屈でもなかった」

それで、銃火に晒されて騒がしくなって、ようやく出てきたわけだ。助けに来ただって……。

状況は、十五割増くらいに悪くなったかもしれない。カナコは日常様々な分野においてエキセントリックともファンタジーとも形容される能力を持った奇人であり、同時に僕の古くからの友人である。

僕が父の後を継いだことに憤り、一時は僕の仲買業者そのものを敵視していたが、時間が経ち、彼女が僕の家に移り込んだ頃からはほとんど社員の一員みたいな感じで振舞っている。

余談だが、佐田も鶴賀もこのカナコが気になってたまらないらしい。顔だけは純真無垢な、ほんの少しだけボーイッシュな感じの美女なのだ。

何にしろ、彼女は度々密航する。危険な目に遭うとなれば、僕は何をどうしたってそこに連れて行きたくなんなか無い、それを知っている、だ。

「助けるって、カナコ、君がどう……」

言いかけて、僕は今度こそ驚ききった。戦闘の緊張や死の恐怖、仲間へのぎりぎりの配慮などで張り詰めていた何かが溶けてはじけてしまったかに感じられる。

カナコが片手で抱えていた物は、古めかしい対戦車ロケットだった。テレビのニュース番組や何かで、紛争地帯を取材する資料映像の中なんかでよく見かける、あれだ。RPG。今では安価で単純でそこそこ強力な、野蛮な武器。

「怪我は、大丈夫、かな」

寝転がったまま許容量を越えて混乱し、そこから脱しようと努力する僕の体に、ぺたぺたとカナコの冷たい手が触れた。皮肉にもその人肌の冷たさで冷静さが幾分戻ってきたのだが、次の瞬間にはカナコはすっと立ち上がって、素早く床を蹴っていた。

彼女が打ち抜かれてひき肉か何かになってしまふ絵が幻視として視界を覆った。実際のカナコは船首の方に向かって跳躍し、ローリングしつつ攻撃を避け、立ち上がってRPGを発射しただけだった。鶴賀までもが、逞しい肉体を揺らしてびびっていた。敵にでなく彼女の蛮行に。

敵の船がぱつと輝いた。信じがたいことに、暗い夜の海で、直撃をくらわせた。鶴賀がいきなり船の舵を切った。目一杯に。カナコが何か叫んだようだった。船がぐんぐんと向きを変え、とうとう百八十度向きを変えてしまった。山猫じみた俊敏さでカナコが右舷の銃座に取り付く。

連射、連射、連射。コンバット・ハイという言葉の神秘を僕は投げ出すことにした。何せそうして機銃を使って敵にとどめを刺した彼女は、何の高揚感にも襲われていないようだったのだ。アドレナリンが体内で大量に駆け巡り、快感に浸かり、笑い、突き抜けるようなひと時を楽しんだ後にどっぷりと後悔や自責に襲われる——人殺しと、それに快感を感じたことに対して——そのプロセスは、彼女には無かった。抜け落ちていた。

僕は臆病に身を低くしながらも、RPGを発射するときのカナコ

の顔をしっかりと見ていた。間違いなく、それは興奮も恐慌も関係の無いあっさりとした顔だった。日本の自室でPSP（骨董品）の画面に向かっている時の方が、3DCGの敵兵やロボット兵器をボタン操作で掃討しているときの方が、よほど感情的だ。

皆、のろのろと身を起こした。静かになつてから、一分、二分とそのまま佇んで、やがて鶴賀は船の壊れ具合を調べ始め、僕は佐田の背中を叩いてやった。佐田は熱心に合掌していた。笑えない。

カナコはまたも僕の隣に腰を下ろした。

「あんなもの、何処から持ってきた」

「会社の倉庫。昔仕入れて、そのままだったんだって。姫若さんに頼んで借りてきた」

姫若は、僕らの業者の一員で、商品以外に必要な物資を管理している。この船も、鶴賀の腰に吊られた拳銃もそのうちの一つだ。

「無事でよかった」

そう言つて、彼女は軽く僕にもたれかかった。倉庫から出てきたときの眠そうな様子が、まだ抜け切っていない。まだ時間としては深夜なのだ。

僕は、カナコの過去も、その特殊性も少しだけは知っている。だから、彼女がこんな凄まじい行為をやり遂げても、そこまで仰天はしなかった。

ただ、燃焼する怒りだけがあった。それは自らに対するものだ。

「ね、今度からは私も連れて行ったほうがいいよ」

「ああ……」

生返事を返す。僕は俯いて、息を吐いた。と、ぽつりと水滴が落ちてきた。

たちまち本格的な降りの雨になった。

僕は、人を殺したことがない。ライバル業者の過激な攻撃要員も、町のチンピラも、政府の役人も、気に入らないマンシヨンの隣人も、殺すべき相手もそうでない相手も——そんな区別があるのなら——僕は殺したことが無い。殺さなきゃ殺されるという状況でも、僕

は人を殺さないだろう。

いや――

殺せないのだろう……。銃を構えて向かってくる敵にも、腹から中身をこぼれさせて悶え、殺せと懇願してくる相手にも、僕は銃を向けることが出来ない。或いは、戦闘機のコクピットでミサイルなら撃てるだろうか。爆撃は、核攻撃は。

僕は何も出来ない気がする。殺さないことはいいい事じゃないかと人は言うかも知れない。嫌悪感を憶えて当たり前だ、出来ないのはお前が善人だからだと。

でも、そんなのは冗談じゃなかった。僕は人殺しが横行する現代の地球に生まれて、自殺せずに育ってきているのだ。そうしようと思えば、第三世界に赴いてごろごろ転がる民兵の死体や、餓死した子供の軀を見ることの出来る世界。

殺す事だつて、もしかしたら生かすことと同じくらい大事で、誠実で、切実で、例えばそこには人が持つべき覚悟や実直さがあるのかもしれないだろう。

僕は、殺しだけは絶対に避けてきている。さっきだって、カナコがいなければ敵を撃てずに、がんばって戦ったふりをして適当な方向に弾をばら撒いて、いずれは三人纏めて殺されていただろう。人が死ぬことに対して僕は人並みだ。そこそこ嫌だけど、地球の裏側で一日に一人死んでいたってさほど気にしない。近い人が殺されるのはそれよりもっと嫌だ。だけど、そんな状況になっても殺しに来る敵は撃たない。

僕は自分の代わりに女の子にロケット弾を撃たせて、何人も殺させる、最低野郎だ。

思い出されるのは、病室だ。

僕が殺せない人間達の代表格。僕の一番大事な友達は、僕が選択できないで迷っているうちに消えてしまった。僕はそれに対し、こともあるうに安堵してしまったのだ。

カナコが、僕の腕を掴んで優しく立ち上がらせた。屋根のある船

内へと入り、座る。

今すぐ誰かに船から叩き落してもらいたい気分だった。冷たく黒い海中に没すれば、幾分僕の何かが晴れるような気がした。

唾と共に色々と飲み込んで、声を出す。

「船は動くかな」

鶴賀に対してだ。僕に比べれば大分タフなメカニックマンは、軽く笑って頷いて見せた。

「少し待ってくれ。多分、大丈夫だと思うけどな」

鶴賀は、そう答えて佐田の肩を掴んで一緒に船体後部へと歩いていった。佐田はまだ震えが残っているようだったが、鶴賀はそのこともちゃんと気にしてくれたのだろう。目先の細かい修理点検は幾分日常的なおいを感じさせてくれる仕事だ。

溜息をつくとき、カナコが小さく笑った。

「悩ましいね」

「そうかな」

「そうだよ。優一は、いつだって悩ましい」

「そうかい……」

なんだかぐつたりとした。カナコは安心できる人物だが、そいつに人殺しをさせれば、もう安心どころではない。だから、連れて来たくは無いのだ。

早く家に帰りたいかった。出来ない料理でもして、悩ましくないひと時を過ごしたい。

選択なんて、こりこりだ。

04

04

選択にはそれ自身に推進力がある。選んで選んで、進んで進んで、関わって関わって。親に兄弟に他人に社会に、そして自分にすら。

そうすることで人は人の中でより進み、社会に適応し、活躍し、可能性を手に入れる。つまるところ豊かな人生とはそれなのです、さあ、進路を決めて頑張りましょう、面接の練習をしましょう、人とのコミュニケーション能力を養いましょう……

僕もトリエも辟易していた。

僕は世の中の人間の選択が、どうにもそれほど高潔な物には見えなかった。人との接触を求めるといったって、どうして人生でそれが良いとされるのか、突き詰めて問えば困惑する人ばかりだ。無知を忘れた選択、その行き着く先は例えば他国の戦争への介入の是非や、二十年前に改変されてしまった僕の国の平和憲法の是非、それに脳死患者の臓器移植の是非——これも多少古い話だけど。

適当な人生論や快楽では誤魔化せない問題に行き当たって、だから人はそんな単純な選択だけで生きているわけにはいかないというのが昔の共通認識だ。僕の親父なんかはそんな中で生きていたんだらう。

だけど、今は違う。愛の矯正、俗に人形禁止と呼ばれる人類愛のための高潔な憲法がどの先進国でも取り入れられた今は、渦巻く平板化されつつある愛が、その隙間を埋める。

優しさによって人を撃てなきゃ、愛なんてクソツタレだ。誰かが僕の耳元でそう呟いた気がした。

身を起こした。自室の机に突っ伏して寝ていた。背中に毛布がかけられているなんて事はなかったけれど、代わりにすぐ手の届く位置にコーラが置いてある。グラスに注がれ、氷の中で小さな泡の音

を立てている。

グリーン・コーラだ。匂いで分かる。

すぐさま飲んだ。不快な眠りの残滓を丁寧につめたい甘みが食道を落ちていく。素材にこだわるコーラ。天然の香り、素材の香り、着色料やカフェインの含まれないコーラ。僕とカナコの好物。

コーラが健康に気を遣うということは、この世の愚かな事象の中でも一位二位を争う馬鹿馬鹿しさだ。体に優しい、人に優しい、自然派、愛のコーラ。突き詰めていけば、それは野菜の絞り汁とかになるんだらう。健康を考えたタバコが最終的にココアシガレットになるように。

あくまで甘みや香りだけ。グリーン・コーラは決して体に優しくない。自然派と謳っているのは、味に関してだ。僕はそれが好きだ。

優しさ。人の優しさ、思いやり、気遣い、愛情。それらを細かく仕分けして、一部だけを助長させるだなんて事は可能だろうか。人類愛のための人形禁止法は人の、生来的に湾曲した愛を平均化平板化して分散させるためのものだ。

あと三十年もすれば、世界中に誰もが均一に愛を抱ける時代が来るという。だが、問題は愛の方向性なのか、果たして本当に。

「おはよう」

戸口に、加奈子が立っていた。三分の二ほどに内容量が減ったコーラのボトルを手に、軽く微笑んでいる。明るい瞳が僕のほうを見ている。二日半前、ロケット弾を撃った目と同じ輝きだ。

「疲れてるみたい」

「そうだね……」

渋々頷いた。あれからのろのろと海上を進んで日本の土を踏んで、商品を仕分けして客の元へ送る。簡単なことだけど、その簡単な流れのすべての部分に煩わしさがあるのだ。警戒、すり抜け、偽装、確認、交渉……昨日一日はハードスケジュールだった。ほとんどは

この自宅をオフィスとして働いたのだが、それがかえって疲れの原因ともなっている。少なくとも空気の美味さだけなら海上のほうが上だ。

シャワーを浴びて、歯を磨く。個室が二つとキッチントイレバス、そんな基本的なものが一通り揃ったこの部屋は、大都市に近い土地であることを考えれば安い。僕とカナコはここが気に入っていた。二十三階の角部屋。

部屋に戻ると、カナコが「棺」を見つめていた。C・Gの眠る箱。外見はまんま棺桶だ。しかしそれがただの棺桶でないことは、蓋を開いたときに分かる。少女を模したドールと共に詰め込まれているのはゼリー状の生体保護プールであり、脈拍、体温、血圧などをモニタする計器類であり、それらを動作させる大容量バッテリーと各種充電機器だ。

「綺麗な人形だね」

そう、綺麗な人形なのだ。

中国のお得意様から格安で引き取ったこの等身大ドール（あの時取り合えず彼らはラブドールと呼んでいたが）は、例え百万二百万で買っていたとしても格安どころか捨て値と言っている、とんでもない代物だった。

「なんでこんなの買ったの」

「珍しい商品だと思ったんだよ。特殊な好事家に高く売れるかもつてね」

「へえ。で、売れそうかな」

「まさか」

カナコは、色々と分かっていて、その上であえて聞いているのだ。この人形は、人形^{ドール}でありながら無機物ではない。ゆったりとではあるが血液が流れ、皮膚が代謝し、呼吸まで行っている。特別製の入れ物は、長期間の輸送にこの生きた人形が耐えるためのものだろう。昨日それが分かってから、ひとまず棺桶に入れたままになっていたのだ。成分も分らない血が流れ、代謝する人形。そんなもの

をどう扱えばいいのか、全く分かった物ではない。

そもそも、これを人形と呼んでいいものだろうか……C・GにAIが搭載されていれば、完全にアンドロイドではないか。アンドロイドは人形か否か。

幸い、C・Gが片言で喋りかけてくることは、今のところ無い。だが、耐え難いほどにその存在は奇妙なのだ。生きた人形は、その存在の曖昧さで持つて僕の感性の最も敏感な部分を優しく締め付けてくるようだ。人形の個性は何か——例えばレジンやプラスチック、樹脂や金属や木材でのみ構成されることではないとしたら、人形のパーソナリティは何処に宿るのか。

それ以前に、そう、材質などと言って誤魔化すこと事態が単純な逃避かもしれない。

我々は、自分にあまり関係の無い他人としての脳死患者や赤ん坊の眠り姿を人形だと感じることは無いか——。

生命とそうでないものの境界線はずっと曖昧なままだけど、両者の違い自体ははっきりしているだろう。実感のあるなしだ。僕らは石ころにそれを認めない。精霊信仰を否定するわけじゃない。ただ、平坦な板の上の両者としての区別だ。

では人間と人形はどうか。赤子が人形めいていることは現代では常識とされている。そのため、病院では各幼児に様々な観測機が繋がれ、身体情報から原始的な感情を読み取り常時視覚化したりすることが多い。子ども自身には全く無意味か迷惑なこの処置は、大人のためにある。怒ったり喜んだりしています、とカラフルな液晶モニターの文字や波形で示される感情を赤子と結びつけることで、無意識的に人形と出会うという事態を避けているのだ。

赤子が人形と思える瞬間があるように、精巧な人形が魂を持つていると感じられる瞬間は無いだろうか。

僕は昔から色々な物に魂があるのではないかと感じてきた。親父が扱っていた人形達は、僕には人間達に見えていた。親父は人身売買をしている悪役のように見えた。十センチも無い昔のアニメキヤ

ラクターを模したゴム製のチープな人形から、レジン製の大きな可動式ドール、愛らしいぬいぐるみ、エロティックな銅像。どれもがひっそりと息を潜めただけの生き物ではないのか。

そして今、僕は本当の意味で生きているのとそうでないのとの境界線上にいる人形に出会っている。

その上、C・Gの顔も体も髪や目の色も指先の形も、僕には見覚えがあった。カナコにも勿論。

「ねえ、これ、トリエに似てるよね——」

カナコがそう言った。どういふつもりで言ったのかは、あえて聞かなかった。ドールは、僕とカナコの共通の友達、トリエに瓜二つだったのだ。姿形と、それから横たわって動かない、その状態も。

トリエは植物状態とか脳死状態とか、そういったものに近い位置にいた。この人形は、どうだろうか。脳幹や大脳に相当する部位はあるのだろうか。頭の中が例えば空洞であったとしても、人形自体が人間に見えてしまうのなら、仮想的な大脳が認められるのか。

生死の狭間をさまよっていた彼女と、生死の境界線上に位置するこの人形。僕はトリエを強烈に感じた。実感として記憶が想起された。肌が焼かれるようだった。

結果として、それは人形なのだ。

棺を開いて、C・Gを取り出す。掴んだ腕や胴体は、ひんやりと冷たかったが、人肌といわれれば信じてしまえる温度だった。常時体温の低い加奈子と比べれば、どちらが人間らしいか難しいところだ。

C・Gは人形としては重い。三十八キロほどもある。身長が160ほどであることを考えれば、生身としては軽い。

目は閉じている。呼吸は眠っているかのように静かで、規則的だ。顔以外の全身を覆っていた黒い皮膜のようなものが、棺のプールの中から出た途端にひび割れて剥がれ始めた。かつての友とそっくりなそれは、ひどく背德的な気がした。加奈子に預けて、しばらく

僕は外に出た。

マンションのベランダでコーラを傾けていると、やがてカナコがC・Gをつれて歩いてきた。

驚いたことに、C・Gは自立し、バランスまで取っていた。加奈子が着せた服を身にまとい目を閉じたままに微かな風を受けている。僕は一瞬、これが本当にトリエなのではないかと疑った。彼女だとすれば、僕は今すぐ逃げ出したい。ここから飛び降りるのもいい。パニックは回避された。一時間経っても、二時間経っても、カナコが様々な方法でコミュニケーションを試みてもC・Gはまともに反応しなかった。立つ事も座することも出来る人形だが、それだけだった。

そして何より。

C・Gは何処までも人形らしかった。勿論僕は人形の中に生き物を感じる性質がある人間だが、C・Gはそれを差し引いてもやはり人形だった。そのたたずまいを見ているだけで、人形的な想念が引き出されるとも言おうか、例えば鉄板やプラスチック片を見て無機物だと意識的にも無意識的にも人が納得できるように、C・Gは人形だった。

僕は深く息を吸って、死人の魂のようにそれを肺の奥から逃がした。

「優一、酷い顔してる」

心配したのか、カナコがこちらをのぞきこんできた。誤魔化そうとして失敗した。

僕は、貧弱だった。腹が立つほどに。それが僕の正当さでもある。

限られた地球の資源は限られた先進国に極度に集中する——という状況からほんの少しだけ抜け出した現代、多少都市から流出したその資源を補填するかのように再生技術や省資源路線は強まった。それと平行して、情報化社会は更に花開いた。

いまや、インターネットに大規模で体勢に依存したインフラは必

要ない。端末が——小学生がお年玉で買ってもらえるような安いPCがあればそれを持ち寄るだけでネットを構成できる。

アドホックネットワークの時代。各端末がそれぞれネットを構成するインフラとなり、それさえあればネットが成立する時代。

大きなシステムが無くとも、安定した情報の送受信が各端末だけで可能になった。それは数十年前から無軌道だと言われ続けていたネットの更なるやんちゃさを引き出すことになりかねない。

だから道路のあちこちにデータ・ポストが置かれているし、私達は遺伝子情報が無ければメール一つ使えない……

トリエは僕に最初にそう話した。だけど僕には良く分からなかった。バイオメトリクス生体認証による登録・認証なんてありふれ過ぎていて、箸を右手で持つことと同じような常識でしかなかったからだ。僕には遺伝子認証とそれによる情報の可能性的統制なんて知らなかったし、データポストの仕組みも各自の端末にインストールされた「慈愛に満ちた監視システム」の役割も知らなかった。

僕と彼女が共通していたのは、だから、そんな知識じゃない。

僕もトリエも社会に満ちた愛にうんざりしていたのだ。人を人形としてみてはいけない、その本質は心であり、人形という統制可能予測可能反抗不可能なものでなく、無形で流動的で無限であるものだ、我々はそこにこそ心を向けなければいけない。そういった部分を人の本質とするなら、我々は民族も言語も文化も思想も遺伝情報も関係なく、互いを愛することが出来るはずです、家族と同じように地球の裏側の未開民族だって受け入れられるはずなのです。

僕はその一割だって信じていなかった。多くの子供達はそんな新しい形の間本物だということを当然として教えられ、常識の一つとして生きていたし、大人達とは言えそれによって少しずつではあるものの紛争が減り、飢餓が減り、自分が人を強烈に憎まなくなってきたことにほろ酔い加減で浸っていた。

「ね、なんでネットが安全なシステムとして使われ続けているか、知ってる」

トリエは小学校の図書館で、僕にそう話しかけてきた。図書館と言っても、そのほとんどがデータダウンロードに頼るようになって久しい時代のものだから、PCがずらりと並んでいて、生徒は自分の携帯に好きな本を検索して読書用ソフトと共にダウンロードするだけの場所だ。民間会社が行う電子書籍作成は、単なるテキストファイルというだけでなく、動画や辞書機能、時には匂いや質感を含めた様々なデータを組み合わせた「上質な」電子ブックを作り上げていた。学校はそれを買取り、生徒に閲覧させている。

古い生の本はひっそりと教室一つ分ほどのスペースに詰め込まれ、図書館の一番奥で眠っているのだ。僕はよくそこで古い文化を覗いていた。社会の、利便性を旨とする風潮から外れた行為という意味で、僕は反社会的だったのだろう。

あるとき、トリエが僕に声をかけたのだ。その頃の僕らは知り合いで何でもなかった。六年生になったと同時に転校してきた女の子が一人いることは、校内に設置された掲示板に控えめに表示されていたから知っていた。だけど、その顔も名前も覚えていなかった。清潔で光に満ちた校舎の中で、唯一古臭く薄暗いその場所で、僕は困惑した。

「なんでって、それは危険なことをする人がいないからじゃないかい」

トリエはクスリと笑った。

「そうだね。確かに、ネットで悪いことをする人は少ないよね。昔はそれこそ匿名性を盾にした無法地帯だったらしいけど」

「匿名性……」

「あなたは何処その誰々君です、って特定されないって事だよ。ネットの中で悪いことをしたりひどいことを言っても、よほどのことじゃなきゃ自分がそれをしたってばれない仕組みだったんだ」

「今だってそうじゃないの」

僕はあまり使わないけど、例えばクラスの連絡用掲示板なんかでも他人の名前を冗談で打ち込む生徒はいるし、かっこいいアニメの

ヒーローの名前で書いて笑われる奴もいる。

「そうだよ。だけど、今のネットは昔に比べて随分平和なんだよ。昔はネット上で麻薬や拳銃や猛獣や毒ガスまで売られてたし、オヤジはジョシコーサーと掲示板で知り合っていてやらしいことしてたんだって。それだけじゃなくて、殺人の予告とか、殺した相手の画像とか、脅迫文とか、一緒に自殺しようってお誘いや政府転覆のためのプロパガンダだってネットに流れてたんだよ。沢山沢山、それこそネットは悪意で一杯だった。ある国では閲覧してはいけない情報、見てはいけないもの、聞いてはいけないもの、読んではいけない物、全部ネットでは手に入れられた」

トリエの言ったことは、信じ難い内容ではあった。僕らは小学校に入って一年もすればネットワークリテラシの授業を受けて、本格的にネットを使うようになる。その授業では当然使用する上での注意だって散々聞かされる。でもそれは長時間使って目を悪くしたり生活に支障をきたしたりしないようにというようなものが大半で、麻薬だとか拳銃だとか、そんな怖い話は出てこなかった。

ネットは、今や町の公園と同じくらいに安全な場所だと認知されている。

「本当に」

「ええ、本当に。ネットは、だからある程度大人にならないと触らせてもらえなかった」

「何でそんなこと知ってるの」

「本に書いてあるよ」

トリエは片手に抱えた分厚い本を振って見せた。僕が読む文庫の小説の三倍くらいの重量がありそうだった。

「人は本当は、自分が誰だか特定されないなら、どんなひどいことだって笑ってやれるような奴ばかりだったんだよ。ほんの十数年前までは」

「今は、皆いい奴になったの」

「まさか」

白い歯を見せて皮肉気に笑いながら、「まさか」と切って捨てた。たまらなく魅力的だった。

「今のネットは、自由だけど自由じゃない、匿名だけど匿名じゃない。薄っぺらな昔のネットの模倣であって、その実厳しい管理のもとにあるんだよ」

難しい言葉を多く彼女は使った。ある程度は理解できた。僕も彼女も紙に印刷された活字に鍛えられていた。テキスト読み上げ機能も近似単語置換機能も役に立たない紙の本で鍛えられていたのだ。

前世紀末から続く混沌とした争いと、信じられない規模での搾取に先進国の人類はやがて怯えた。2010年辺りになっても相変わらず日本人は二酸化炭素量を気にしながら飢餓に苦しむ黒人やトラックでひき潰される難民の事なんか考えていなかった。只知道っていた。その内、そういった状況に震える人々の中から人類愛促進のためのメソッドが提出された。

「人形禁止……」

「そう。各国で法の中に組み込まれていた。人形類の所持、取引の禁止、人を人形と見立てるあらゆる思想表現の撤廃、形質・所属来歴など外的側面への執着からの脱却をそれは唱えた」

そんな中で、ネットは各端末そのものがシステムとなるアドホックへと移行した。当時まだ細々と残っていた人形擁護思想を始めとする反社会的思想は、人形撤廃社会にとって最も恐れるべき敵の一つだった。

だから、遺伝子認証によるアカウントが、データポストが、「慈愛に満ちた監視システム」が現れた。

アドホックネットワークは、インフラを必要としない分、統制されにくい。個人の端末が集まるだけで構成されてしまうネットを取り締まる術が必要だったのだ。

ネット上の情報は、個々人の極めて自由な行動によって発進されてしまう。その統制は並大抵のことでは達成できない。

政府は、このアドホックシステムの弱みと、大衆を味方につける

ことでそれを可能とした。

データポストは、表向き個々の端末が情報の送信経路となるというシステムの補強として導入された。データが送信経路をケーブルなどによって定められず、またその優先順位をつけるシステムが存在しない中で、いくら昔より大幅に発達したと言っても、個々の端末は不備を抱えがちだった。その解消を謳ってデータポストはあらゆる場所に建てられた。

つまり、政府はネットシステムの進化を微妙に退化させたのだ。ポストは情報の送受信を補強し、快適なネットを実現した。同時に、ポストには統制のシステムが組み込まれており、人形廃止社会にとって「好ましくない」情報の通過を見逃さない。そのシステムこそが「相互慈愛プログラム」、僕とトリエが「慈愛に満ちた監視システム」と呼ぶものだ。

そのシステムは一般的な携帯やPCなどの情報端末すべてにデフォルトでインストールされていた。システムを内包する端末は遺伝子情報に基づくID（つまり、一人一つしか持つことの出来ないものだ）で、生体認証をパスしてログインすることで初めて使用できるようにになっている。どんな情報を発信しても、その情報には見えないタグがついている——遺伝子というタグが。

遺伝子情報と個人情報とはセットにして国のデータバンクに登録されていて、架空の遺伝情報は使えない。

「じゃあ、そんなシステムに頼らずにネットを作ったらいいんじゃないかな。IDなんか無くても使えるネットを、何人かで集まったださ」

「それを防ぐための『相互慈愛』なんだよ」

つまりこういうことだ。先進各国国民の多くが現今の体制——人形廃止を初めとした人類愛主義を受け入れ肯定している。だからほとんどの人は慈愛監視システムを進んで導入した。

そんな中で、それに属さないネットはくつきりと浮かび上がるのだ。タグつきの情報の流れの中で、従社会的な人々の端末上をそん

な情報が流れれば、たちまちお縄だ。

危険思想は、ネットで伝播させることが出来ない。もし未知の言語でネットを作っても、ポストはそういった情報すら検知する。

大衆による大衆監視システム。相互に監視し合うシステム。よそ者を糾弾するための仕組み。大衆は自ら望んでネット上の自由を一部を捨て去ることで危険思想が芽生え成長することの無いネットを手に入れた。それが「慈愛に満ちた監視システム」なのだ。

長々とそんな話をトリエから聞いた僕は、何だか凄くむなしい思いに捉われていた。もっと希望的だと思っていた社会に対する幻想が、すっかりトリエの言葉によって掻き消えてしまっていた。

「変化した愛が、平和なネットを生み出したの。麻薬も児童ポルノも無いネットを」

大人びた口調で、得意げな猫のように彼女は話した。僕はずっと本棚の端に設置された踏み台に腰掛けて聞いていた。

「……まっぴらだ。冗談じゃない」

そう呟いた。トリエは驚いたような顔になって、僕のことを見つめた。

「どういう意味」

「そんなの、愛だって言われても、納得したくない。規範は愛じゃない」

少しすねてそういった。だけど、トリエは対照的に凄くうれしそうだった。透き通った瞳を綺麗に輝かせて、本を差し出した。

「これ、今返しに来たんだ。よかつたら」

僕とトリエは、その時から友達になった。

05

05

突然だけど、僕とカナコはひとまずC・Gをケースに戻してネット上で行われる定期相互成長会議グループメンタリングに参加していた。

「あなた方は恋人同士なんですよね。よかったら、お互いの何処が良かったのか、教えていただけませんか」

僕はその質問に面食らった。予想していなかった質問だ。

各市町村で当たり前に行われるメンタリングは、公式の物と非公式の物があり、公式のそれには住民登録がなされている者に一定の参加ノルマを課している。

メンタリングと言って、何が行われるのかといえばそれは今殺気の質問に凝集されているかもしれない。つまり、愛の話だ。

「そうですね……」

僕は照れたふりをしながら、注意深く言葉を選んだ。当然僕と、「あなた達」と一纏めにされたカナコは恋人関係でも何でもない。

幸い、加奈子は気を悪くしたふうでもなく、無邪気な顔で僕と同じくゴーグルの中の仮想会議場に視線を送っている。

「彼女は率直な——自然的で、それでいて人の内面へと優しく近づく人です。また、自分に対しても人がその内面へと目を向けるように望み、自然体でそれをやってのけます。我々が愛の本質が人の精神性にしかないという人類的な進歩を得たことに私は素直に感動しています。だから、彼女はその、とても——」

「あなたに合う人だったのね。ありがとう、そういう人だというなら、私達も見習いませんか、ねえ」

質問を投げてきた中年女性には、僕やカナコや他の大勢の参加者のようなゴーグル、全視界型映像を自分の3D仮想モデルにリンクさせた、流行の出席の仕方ではなく古臭いテレビ電話のような手法で

夫と参加していた。CGで緻密に表現された僕らと違って虚空に浮かぶウィンドウに実際の夫婦の姿が移っている。

僕は仮想モデルの感情表出機能——実際の僕の表情なんかをCGに表すもの——を一時的にオフにして、ダミーの表情パターンを貼り付けた。その上で、現実では苦笑した。

「カナコさんは、どう思ってたっしやるの」

今度は彼女に厄介なそれが降りかかった。僕のように考え込まずに、すぐにカナコは答えた。

「私も、彼と全く同じです」

よどみなくそう答えた。彼女は間違っても僕の内面なんて考えないし、どんな人間の内面だって認めない人間だ。だから、その答え方は僕が教えたものだった。

僕もカナコも法を犯し軽視するパブリック・エネミーだけど、普段は大人しい市民だ。こうやって義務としてメンタリングにだってでなきゃならない。

「まあ……」

なにを勘違いしたのか、夫人は感じ入ったように溜息を洩らしている。こうして、決められた手順、方法で行われるメンタリングの最後の時間、自由対話が終っていく。

僕は自分の語った「上手い答え方」に軽い吐き気を覚える。でもしょうがない。何せ日本に限らず先進国の人間の常識的認識ときたら、ひどいもんだ。

即ち、愛の本質は形質、来歴にあらず、精神性にあり。それだけだ。もともと人種民族などによる愛の歪みの矯正を目的とした人形廃止が受け入れられて出来た社会なのだから、当然のことかもしれない。

僕はその夜、夢を見ていた。

毎日夢を見る。夢を見ない日は珍しい。僕はとても軟弱で、それは、トリエがいなくなってから夢のある夜が爆発的に増えてしまっ

たことにも現れているのだろう。

「トリエ……」

呟きながら立ち上がると、そこは仄暗い、大きな倉庫かどこかの工場の廃墟のような場所だった。僕はその入り口に立っていて、暗くて奥のほうは窺えない。ただ、荒々しい息遣いと、時折怒声が聞こえる。野太い声だ。

僕はそれが恐ろしくて、倉庫を背にして走った。しばらく走ると、海岸に出た。

トリエがいた。

「こんにちは、優一」

彼女は白いワンピースに身を包んで、風に髪を揺らしながら砂浜を歩いていた。その砂浜には、海草や流木と一緒にあって多くの人間が転がっていた。どれもこれも腐り始めているのか、粘つくような匂いと奇妙な静けさが辺りに充満している。

僕は怖かった。トリエに会うのが、怖くてたまらなかった。無意識に二、三步後ずさって、震えた。

「優一、久しぶりだね」

「ああ……」

「でも、夢では何度もあつてるかな」

そう、夢ではもう十度以上再会している。僕の夢のトリエ。彼女はいつも、僕に向かって手を振る。

「優一、訊いて良いかな」

なんだい、とは軽々しくいえない。というのも、僕は既にそう訊かれた時点で何を質問されるか大体見当がついていた。

「優一、私、生きてるのかな」

「分からないよ」

分からない。

君は脳の多くに破壊的なダメージを受けたんだ。病院に運び込まれたときは既に死んでいたのかもしれない。だけど医者は懸命に蘇生を試みたし、君の体はそれに健気に答えたんだ――。

君はベッドの上で寝返り一つ行わなくなつた。

なあ、トリエ。君は、君は、君は何で。

「何でもよくに決めさせようとしたんだ」

掠れた声での絶叫。それが喉から勝手に出た。

僕は既に泣きかけていた。蒸し暑い海岸の空気と、トリエの視線が僕の体から水分を奪う。汗と涙が失われていく。

「君は、家族にでもなく、医者にもなく、僕にその選択を委ねると、そういう意志を生前に示したじゃないか。僕に、君の体をぎりぎりで支える機械を止めるかどうか、そんなこと、なんでやらせたんだ」

「なら、私は生きていたの」

「君は目を覚まさない状態だった。大脳の多くは傷ついていたし、その更に奥にも障害が及んでいると医者は言っていた。そう、言っていたんだ、君が目を覚ますことなんて、あまり考えられることじゃないって」

「私は脳かな」

「トリエは、医学的な、或いは哲学的な、境界線上にいたんだ。脳以外の肉体が九割以上生きていて、そういう状態だったんだ。だけど、脳に関して言えば、一体何処まで無事なら君が君であるのか、何かを思うことが出来るのか、いろいろなことを考えたり分かったり出来るのか、そんなこと分らないことなんだ。脳地図は千九百年代には作られて、その後複雑に観察され注意深く区分けされていたけど、でもだからって意識や魂をマッピングされた脳から取り出すことなんて出来やしないんだ。何処までの神経細胞が意味のある、価値のある君を構成するかなんて、分らないんだ。僕は死を見極めようとした。だけど、死は何処にもないんだ……生きている限り、何処にも」

僕は精一杯の言い訳をした。トリエの追求から逃れようと、専門書を斜め読みした知識を使って必死にアピールした。僕は分らなかった。だけど医者だって誰だって分からなかった。君の生命維持

を絶つかどうかなんて、決められることじゃなかったんだ。

トリエは、悲しそうな、また諦めきれないような顔になって、僕に再度訊いた。

「優一、私は生きているの、死んでいるの、どっちなの」

「知らない……知らない……僕は決められなかったんだ」

決められなかった。迷って、悩んで、わめいていた。そうして数日間を過ごして、げっそりとしながらいつものようにトリエの病室を訪れたある日、トリエは消えていた。

どこかに移送されてしまっ、それが何処なのか、トリエが結局どうなったのか、何も分からなかった。

トリエは小さく笑って、僕の元に歩み寄った。俯いて謝る僕を、抱き寄せた。

肌は冷たかった。まるでC・Gみたいだなと感じて、でもそれが何のことか上手く思い出せずに諦めてしまった。

「優一は、私が生きてると言っているのかどうか分からなかった。だから、殺していいのかも決められなかった」

優しくそう言っ、僕の頬に手を触れて自分のほうへと向けさせた。トリエと至近距離で見つめ合っ、猛烈な懐かしさを感じていた。

「そうだ、ぼくは、決められなかったんだ」

「優一は考え抜いて、悩みぬいて、どうしようもなかった」

「そうだ、そうなんだよ」

ぼくはもう完全に泣いていた。無様でみっともない。いつそ醜悪と言っていいくらいだった。

それでもトリエは優しい声で続けた。

「優一は私を考えてくれた。人形として扱わなかった」

「ああ」

「私は、あなたに昔私が心でも人形でもないと言っ。それを覚えていて、優一は私をどう扱うか決めあぐねた。脳の損傷した体を殺すかどうか決定できなかった。それは、責任ある行動だった」

「そうだ、そうだったんだ、トリエ」

ぱっとトリエは僕から身を引いた。そこには、嘲るようなくらい笑みが待っていた。

「嘘」

それまでに無く、強烈にその言葉が僕に突き刺さった。

トリエはいつの間にかとんでもなく恐ろしい声に、死人のような肌の色に、暗い海面によく似た瞳の色に変わっていた。

「優一は何も決めなかった。私を扱おうとしなかった。人を人形としても心としても、その両方としても扱わなかった。私の選択に答えなかった」

僕は悲鳴を上げた。トリエに背を向けて海岸を走った。何処までもトリエの声は僕の耳を追ってきた。

「あなたは逃れられない物から逃れようとした。決めないことに決めた。私を信賴していなかったから、私の決めたことに従えなかった。私を殺せなかった」

きりきりと痛む肺を押しつぶすような圧力と共にトリエの声は響いてきた。僕は謝っていた。走りながら、砂浜と海と空に向かって絶叫していた。

「おかげで私はあなたにとってのゴーストになってしまった。生きているのか、死んでいるのか。ねえ、優一」

悪かった、すまなかった、許してくれ、ごめんなさい、もうしません、申し訳ありません、僕は、僕は、僕は、僕は。

「優一は誰も愛していないから、何も決められないんだよ。そのくせその振りだけは一人前だから、私と気が合ったようにしていたんだよ。人形禁止社会に反発していたのは、体制の内容が問題だったんじゃない、ただ単に、優一は愛が鬱陶しかっただけなんだよ、優一は人を物としても精神としても見ていなかった。優一の世界には優一しかいなかった……」

気がおかしくなつて、息も吸っているのか吐いているのか、何も分からなかった。

砂浜の死体はいつの間にか数が増え、僕は山のように詰まれた死体の中を逃げ回った。地面が見えないほどに詰まれた腐り物の中を泳ぐようにして進んだ。

死体の一つが、瞼を開いた。そこには夜の海面色の瞳があった。誰もがトリエだった。僕はトリエを踏みつけて、腐った鎖骨を折り砕いて、脛を踏みつけ肉を剥がして、髪をつかんで頭皮ごとずるりと剥がして逃げた。

空が回っていた。海は死体で溢れていた。僕は叫ぶ。

「無責任だった、ああ、そうだった、トリエ、だけど僕は、いや、君はもういない、僕は、君に何が出来る、ああ、くそ、だけどこのままじゃない、絶対に、何か……」

何か、あるはずだ。僕はこのままでいるつもりはない、僕は、逃避したままではいたくない。

立ち止まって、辺りを見回した。空も地上も、全てをトリエが埋め尽くしていた。

そのすべてが、代謝し自立する死体だった。

C・Gだ。僕はその言葉を意識して、倒れこんだ。

音がして飛び起きた。何か、致命的なことが知らないうちに過ぎ去っていった――

頭を振って、素早く布団から抜け出す。

音を立てないよう細心の注意を払いながら、部屋を出る。住み慣れた部屋のそこかしこに何か、まわりつくようないやらしい雰囲気気が張り付いている。

息を殺して、廊下を移動する。

なんだろうか……

疑問の正体は、すぐに見つかった。玄関の扉が開いて、風邪がゆつくりと夜気を室内に運んできている。

直感する。それに従って、すぐさま外へと飛び出す。マンションの前に、黒い車が停まっていた。一目で分かる、高級車だ。スモークがかかった窓の中に見えないはずの誰かが見えるようだった。タイヤは多重構造の半永久使用のものだ。

一般的な家庭において手軽に見られるものではない。

「カナコ！」

叫んだ。既に同棲相手にして華麗な相棒は、僕なんかよりも敏感に変化を感じ取っていたのだろう、外にいた。彼女が車へと走り、頼りなげなひらひらとした寝巻きのワンピースを揺らしてドアに手を伸ばす。

が、文字通り一歩遅かった。痼癢を起こしたかのようにエンジンが音を立て、急発進する。特殊樹脂のタイヤが普通の物とは異なった重い音を響かせた。

息を吐いた。何か、してやられたのだという感覚が僕を襲っていた。

「C・Gが奪われた」

カナコが、珍しくしおらしい声でそう話した。彼女の部屋には、いくつかの足跡となにか荒らした様な形跡がある。

C・Gは棺桶だけを残して消えていた。中身を失った高性能の介護用プールベッドみたいなケースが、そのがらんとした空洞を見せ付けている。死者が、自ら蓋を開けてゾンビーと化して出て行ったように見えないことも無い。悪趣味な妄想だが。

「私の部屋に置いてあったのに。知らない奴が来て、起きたときにはもう運び出そうとしてた」

「怪我は」

訊いてみても、カナコは答えようとしなかった。俯き加減のままに、すねたような口調で続きを語る。

「止めようとしたけど、相手は三人もいた。何で気づかなかったんだろう」

溜息をつく。この少女は、自分が危険なことをした自覚があるのかないのか。子とあることに自分も危険な取引に連れて行けという細身の女性。

カナコは、何かと僕と一緒にいたがる。買い物や仕事での遠出、メンタリングのためのネットダイブ、朝の散歩。それが自分の役割だとしても言わんばかりに、僕について歩くのだ。理由は良く分からない。でも、彼女は何も執着や恋愛でそれをしているわけではない。そう、もっとこう、原始的な何かにも思える。親の後について歩く子供のような。

まあそれはそれとして、預けてあったC・Gを奪われたことがショックだったのだろう。自分も取引に連れて行けと頼み込んだ数日後の失態ということもあるのかもしれない。

「今度から、そんな危ないことしないで寝た振りしてればいいんだよ」

「でも」

「なんだい」

「あれは、トリエだったのに」

きん、と、耳の奥が鳴った。

トリエ。確かに、瓜二つだといえた。

「……違うよ。人形だ。ただの、どうしようもない、ドールだよ」

「だけど——優一は、トリエが大事だつて言つてたよ。昔。人形がもしれないけど、ただの人形ならなんで売りに出さなかったの」

「そりゃ、正体不明の怪しい一品だったし……」

「でも、人形でしょ？」

「……………」

ただの人形だ。ただの、そっくりさん。ああも実物に似たような人形が、あるのかどうかは疑わしいが。

疑わしいが、事実は事実だ。なぜなら、トリエ本人はすでに亡くなっている。僕が煩悶しているうちにどこか知らない場所に移送され、何年か経つて、家族には死亡が通告された。

何処で死んだのか、どうして死んだのか。家族すら知らないままに、彼女は社会からあっさり消えていった。

「まあ、いいさ……。だけど、なんで人形なんか」

高価な人形ではある。が、僕のような業者でもなければ財産としての価値は無い。レアな品であることには違いないだろうから、同業者だろうか。

「黒くて、変な服を着てたよ。メット被つてて、顔は分からなかった。でも、素人くさくは無い感じ」

「敵対業者かな」

「うっん……そうかもしれないけど、でももっと『上手い』感じだった。手馴れてて、付け焼刃じゃない——」

遠くを見るような目で、加奈子は考えてそう言った。

「深夜にそんなわけの分からない連中に忍び込まれたわけか」

良く無事だったと、幸運に思ふべきかも知れない。しかし、スマートなやり方を考えるなら、僕らを殺してからということのほうが

安全な気もする。警察だつて、僕が人形仲買業者だつて分かれればあつさり捜査する気無くすだろう。一昔前ならヤクザ同士の抗争と片付けられる争いがあつたように、現代では仲買業者同士、製造業者同士の争いは珍しくない。

きゅつと、二の腕を掴まれた。カナコが、小さく身を丸めて、腕に触れたままこちらを窺っている。

「優一、ごめんね」

「いいよ。いや、むしろ、怪我が無くて安心した」

「ごめんね……」

カナコの謝罪は、奇妙な響きを持っていた。普通人が誠意を持って謝るときのような感情が、すっぽりと抜け落ちているのである。

「謝る事の練習」風景を見ているようだ。

そのくせ、どこか痛切な響きも持っている。謝罪とはずれた情感を持つ、謝罪の言葉。

もう一度溜息をついた。僕は、ヤクザな商売人だ。

世界中でまだ年端も行かない子供が、気まぐれに地雷原を走らされたり食事にガンパウダーを混ぜて飲み下し、夢見心地でA kを構えている。

人類愛志向の世界的な政策で、そうしたチャイルドソルジャーの数は減った。紛争への介入はその方法を少しだけ変えられたし、利権主義が目減りしたことで紛争地帯はその煽りを受けにくくなった。そのため、今では少年少女の兵隊は、「たつたの」十五万ほどしかない。十五万の子供達、この世界に残された最も惨いとされる犠牲者の代表達。少し前までは三十万近くいたらしいから、世界は本当に平和になったのだと、どこかのキャスターは話していたっけ。カナコもトリエも、元はそうした「かわいそうな」子供達の一員だった。日本よりも小さな島国や乾いた土地で戦ってきた。日本が、人的資源としてそうした子供を受け入れるという政策を実施して、彼女達は小銃と対戦車砲を手放した。

彼女達がどんな扱いを故郷で強要されていたか、それは容易く想像できてしまう——ようで、その実僕らのあまっちょろいイメージの三倍は酷い。

二人は、戦場にいた頃はまだろくに背も伸びていない子供であった。だけどカナコは優秀な兵士だったらしい。では、トリエは。

戦場に少女として生まれることの悲劇は、まあ、言うまでも無い。二人とも、日本に来て、満足に学校に通えるようになった。その気になれば、WEBの漫画雑誌や、好きな柄のシャツについて甲高い声で級友と語り合っていることだって出来たはずだ。

だけど、二人はもっと偏向したコミュニティを求めた。そこに何故僕が入っていたのか。

僕とカナコとトリエは、それぞれに社会の人形廃絶を忌避しながら、別々の意志を持って、だけど一緒にいた。

共通していたのは、日本であれアメリカであれ、地雷やライフル弾ではなく、デートの相手やテレビの買い替えを心配すればいい国が、単なる戦場の後方陣地である、という認識だ。

僕達は戦場にいないんじゃない。

僕達は悲惨な戦場から離れているから無力だなんてとんでもない。僕達は自分の身を投げ打って紛争地域をどうにかしようとはしない。

そのかわり、僕達は明日日本が百年続く紛争に巻き込まれたって、騒ぎもしないし嘆きもしない。

それが、愛しているって事だ。何を？ 勿論、皮肉を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5825/>

C.Gの人類愛

2010年10月9日13時13分発行